

山陰の「小さな文化」を楽しむ

ひだまりのおと

第5号 2023

特集：「さがす」





HOME SWEET HOME (松江市)

本誌『ひだまりのおと』は、島根県立大学短期大学部文化情報学科の授業「文化情報誌制作」の成果物です。
特集ワードからそれぞれの発想で取材先を決め、写真撮影、記事執筆、誌面レイアウトまで、学生が行っています。

目次

巻頭 (寄稿)

有馬毅一郎 (島根大学名誉教授) 私が出会った「教育」(点描) 1

特集 「さがす」

島根で探す小泉清 (松江市) 2

えがおをさがす (松江市) 6

猫と過ごす憩いの場 ～癒やしを探して～ (津和野町) 10

島根の良さを「さがす」(出雲市・雲南市) 14

ヨコバマを掘る (松江市) 18

芸能の守り人を「さがす」～^{ぼんない}番内を知ろうの巻～ (出雲市) 22

大根島で過去を探す (松江市) 26

川跡コミュニティセンター探訪 (出雲市) 30

私の里親里子探訪記 (松江市) 34

K A N B A N (松江市) 38

編集後記 (裏表紙裏)

表紙題字 篠村優花 (総合文化学科卒業生)

私が出会った「教育」(点描)

島根大学名誉教授 有馬毅一郎

今、八十路の半ばを歩みながら、実にさまざま「教育」に出会い、携わってきたものだとの思いに至っている。それぞれに学んだ雑多だが貴重な教訓が頭を過つてくる。

● 「へき地教育」

超山間地で育つたこと、教員として当時に多郡の最小規模中学校での経験を得たことは、戦前以来の農山村社会を基盤として展開された「へき地教育」を体験・実感できたという意味で幸運であった。

経済の高度成長から低成長・衰退の時代を経て、今教室外の「地域こそ生きた教育地」とする理念が揺るぎ始めている。道草もしない基盤薄弱なまま成長を急がせている現象が、さまざまに進んできていると言えらるだろう。

● 「社会教育」「家庭教育」

健全な住民の育成に強い視点を持つのが「社会教育」。長い社会教育委員の経験からも公民館等や住民自身も主体性を発揮する方策を考えさせられた。実に幅

広く底深い世界だ。

戦後の「家庭教育」は、1970年代頃から、国が大きな予算を組んで、教育行政として参入した。経済の急速な伸張が生んだ青少年問題に対処し始めたことから始まった印象がある。「親」の教育という色合いが強く、予算が減少した現在も「親学」等として努力が続いている。賢い大人の育成は、生涯にわたる教育として、どんな時代が来ても廃れてはいかないテーマだ。

● 「福祉教育」

1977年に島根県社会福祉協議会がスタートさせた。全国に先がけた動きでもあった。地域社会の中で、大人も子供も「思いやりの心」が大切な時代が来るという先見性があった。

初期には推進に困難があった。学校でも総合的学習の時間に「福祉」が位置付けて、やっと加速した。人生の生き方や心の育成は、体制作りも時間も必要となる、今、半世紀の積み重ねがあつて、ようやく広がりが出てきたと言えよう。

● 「NIE教育」

「Newspaper in Education」(教育に新

聞を)は、「文字離れ」に対応したアメリカ発の活動と言える。日本では独自の発展も。

島根県では、推進協議会が1995年に設立され、30年近い実績を積んできている。教室の授業に新聞の情報を活用して生きた風を吹き込み、活性化をめざす。世界的な動向を指標にしながら、日本化し、実態に合った教育活動にリニューアルする力は、これからの教育に一層必要となるだろう。

● 「環境教育」

ブラジルに導入・普及する事業に携わった。

海や川の汚れ、街中のゴミ等の現象に象徴されるように、環境問題、環境保全の基礎作りの活動。JICAの依頼で、しまね国際センターが受けて、大学や県の協力でチームを結成して実施した。

たまたま2015年から国連発の「SDGs」という地球的指標と重なるテーマでもあった。世界中の共通の促進課題という面がある。日本こそ、一層本格的に展開を真摯に取り組まねばならなくなっている。

● 新しい「塾の教育」

「尚風館」という、地元ごうぎん文化振興財団が青少年教育事業として開始し

た私塾がある。

自然や郷土、伝統文化、国際社会等の「学校ではできない」学びを通して、将来大局をとらえ、適時適切な判断ができる人物に育つことを願う。

小学4・5・6年生の3ヶ学年1クラス20名でスタートし、3年間を初等課程、続いて中等課程、高等課程と、社会人になるまで学ぶ。

講師、多数の非常勤講師、事務局と、手厚い指導体制で、斬新・クリエイティブな教育活動を実現している。

このような独自の新しい私塾あるいは教育組織の創設が、教育のあるべき姿を求めて芽生えることは望ましいことだ。

● 「ふるさと教育」など

社会にはさまざまな呼称の「教育」が多数ある。いずれも時代と共に生まれ、独自の本質と願いを持ち、貴重である。

20年程前に県教育委員会主導で誕生した「ふるさと教育」は、地域と学校の共働の教育として推進されてきている。今、「学力」低下の観点から検討の声も出てきている。

全ての「教育」は、本来「学力」も含む人間育成を目指している。その深化を知恵を出して根強く努力し続ける気風こそ「教育」に必要な文化だと思う。

(2023・12・15)



ありまきいちろう
島根大学名誉教授／全国社会科教育学会顧問／島根県NIE推進協議会顧問ほか／松江キャンパスの前身「島根県立島根女子短期大学」最後の学長

特集「さがす」

島根で探す小泉清

(松江市)

山崎かおる

松江にゆかりのある有名人といえば、至るところから小泉八雲の名前が出るでしょう。しかし、彼の三男・小泉清が画家であったことを、ご存じでしょうか。

小泉八雲記念館では、小泉八雲の作品や遺愛品の展示を通して、彼の人生の航跡を楽しむことができます。今回は、小泉記念館で開催された企画展「小泉清―その生涯とコレクション展」をきっかけに、島根県内の収蔵品めぐり、小泉清の生涯と絵の魅力について、お話を伺いました。

2023年10月6日より、小泉八雲記念館にて「小泉清―その生涯とコレクション展」が開催されました。小泉八雲（1859―1904）の三男である小泉清（1899―1962）は、読売新聞社主催第一回新興日本美術展の読売賞受賞によって、46歳で画壇デビューをしました。なお、今回の企画展は、清の作品のほか、家族や友人にあてた書簡、デスマスク、愛用した道具などが展示されています。



ライブトークの様子

また、翌日7日の「第43回くるま座ライブトーク―小泉家の流儀」では、小泉清の直系の孫である小泉達矢さんと、小泉八雲の直系のひ孫である小泉凡さんの対談が開催されました。達矢さんと凡さんと、ライブトークの主催を務める松江観光協会・観光プロデューサーの羽田昭彦さんにお話を伺いました。

小泉清の生涯

小泉清は、1899年12月20日に小泉八雲の三男として生まれ、4歳のときに八雲が他界しました。早稲田中学時代に八雲の教え子である会津八一に絵の才能を見いだされ、東京美術学校に入学しました。3年で中退後、針シヅと結婚し、しばらくはバイオリン奏者として生計を立てました。30代半ばころから、再び絵筆をとるようになり46歳で読売賞を受賞し、画壇デビューを果たしました。61歳のとき最愛の妻に先立たれ、2か月後の1962年2月、「血が複雑すぎたのだろう」と遺言を残し自らの命を絶ちました。

清は、家庭人として優しさとユーモアにあふれ、芸術家としてコンプレックスと情熱を絵に込めた人物だったそうです。清は生涯にわたり、自分の中で相反する西洋的なものと東洋的なものへの葛藤に苦悶し続けました。清の日記の一節

に「絵を描くということは死闘である」と書き残されており、作家としての生活を象徴する言葉として、東京浅草の華蔵院の筆塚に直筆で刻まれています。清は売るために描くのではなく、自分の納得のいく作品を追求するために常に限界を超えようとする、芸術家として完成度の高い画家でした。また、自殺という最期について語ることは、八雲のオープンマインドの発露であると羽田さんにお話しいただきました。

今回の企画展の目玉は、1961年の「海」です。130.7×89.7センチメートルの大きなキャンバスには、鮮やかな色彩の絵の具が豪快に盛りされており、その力強いタッチからは、荒々しい波が岩に打ちつける様子が感じられます。清の作品には、房総半島や犬吠埼を描いたとされる海の

作品が多くあります。清の海の作品について、達矢さんは、水辺の景色というのには、意識せずとも原風景として人々の心に残っているからであるとお話ししてくださいました。凡さんによると、魂の故郷である海を見て安心するというのは、



「海」1961年

普遍的な感覚であるそうです。海といえ
ば、八雲は、生涯海と関わり続けた人物
であり、来日後も山陰沖や焼津の駿河湾
で遊泳を楽しみました。



羽田さん(左)と筆者(右)



達矢さん(左)と筆者(右)

つぎに、小泉清の別の作品をさがすた
め、島根県立美術館を訪問しました。こ
こでは、学芸員の柳原一徳さんにお話を
伺いました。柳原さんは、もともと西洋
絵画が専門だったようですが、島根県立
美術館に来てからは、日本近代洋画を
扱っているそうです。西洋絵画とは異な
るおもむきがあり、とくに清の絵にはた
いそう驚いたそうです。「小泉清―その
生涯とコレクション展」にも携わってい
らっしゃいます。



八雲とのかかわり

1950年、小泉八雲生誕百年記念小
泉清個展が開催されました。それを機に、
清は初めて、父母のゆかりの地である松
江を訪問しました。さらに、美保関や隠
岐諸島なども旅行し、多くの水彩スケッ
チを残しました。八雲に関する彼の思い
として、「いなばや」のエピソードがあ
ります。大社のいなばや旅館は、その歴
史が400年を誇っていて、宮内庁の指
定旅館の由緒ある宿であり、小泉八雲ゆ
かりの宿でもあります。小泉清がその旅
館を訪れた際、八雲の世話をした方が、
彼を見てすぐに八雲の子であることを理
解しました。そのことを聞いて、小泉清
は涙を見せたそうです。西洋人である八
雲と似ていることがコンプレックスでも
あった清ですが、他人からの指摘は逃れ
られない苦しさでもあり、うれしさでも
あったのではないのでしょうか。墨画の「ヘ
ルン像」は、父を想って描かれたものだ
そうです。

小泉清の絵の魅力

清は、当時の日本人画家と同じ流れの
中で、ゴッホやゴーギャンなどフォー
ヴィズムの影響を受けました。20世紀初
頭に台頭したフォーヴィズムは、ルネサ
ンス以降の伝統的で写実的な印象派の絵
画とは大きく異なっていました。印象派

は対象をそのまま描きますが、フォー
ヴィズムは日本では野獣派とされ、対象
から受け取ったものを表現します。原色
を多用した強烈な色彩と、荒々しいタッ
チが特徴的な作品です。この分野では、
具象的なモチーフを簡略化し、抽象的に
描くことが重要視されます。

清の絵も、モチーフから得られる本
来の色彩ではなく、心で感じた色彩を感
情的に、抽象的に表現されています。清の
作品は、タイトルが設定されていません。
清の作品は、タイトルが設定されてい
ないものが多くあります。特に風景画では、「海」
や「山」といったように、地名を残して
いません。具体的に場所を特定すること
よりも、その場に残された伝説や背景を





筆者（左）と柳原さん（右）

意識し、風景を概念としてとらえることを重要視していたことが分かります。さらに、清の絵は、絵具量が多く、絵の表面は岩肌のように隆起しています。油絵の描き方として、表面に滑らかさを持たせるのが伝統的でしたが、清の油絵は筆の痕跡をよく残しています。何重もの絵の具の層は、何度も厚塗りをしてできあがったものであり、清の絵に対する態度を感じる事ができます。清は、しばしば日を置いて作品の完成を改めており、納得がいかなければ一つの作品に何年越しかで筆を入れ続けることもありました。また、絵の具をチューブから直接キャンバスに絞り出す、新しい技法を作



◁（右）「赤不動」（左）「青不動」
いずれも島根県立美術館所蔵

品に取り入れていました。先輩権威の強い画壇において、当時の画壇のトップであった梅原龍三郎にも影響を与えたそうです。チューブ描きによる立体的な絵の表面からは、見ているうちに画家たちの息づかいが感じられます。

取材を終えて

今回、小泉八雲記念館と島根県立美術館を取材させていただきました。松江において、小泉八雲の名前はよく知られていますが、三男・清について、その人生や作品はあまり知られていません。筆者自身、小泉八雲記念館での企画展がきっかけで、清を初めて知りました。ライブトークでは、この記事で取り上げた清の他にも、小泉家の八雲に対する思いや歴史、流儀について語られ、これまでの松江の人びとが知る小泉八雲の物語がより深まりました。島根県立美術館では、清の作品の魅力について、日本の画壇の歴史や当時の風潮の中で清がどのような存在であったかを知りました。

小泉八雲記念館の「小泉清―その生涯とコレクション展」は、2024年の6月9日まで続きます。また、島根県立美術館でも、清の作品が収蔵されています。

（やまさき かおる）



島根県立美術館展示室

えがおをさがす

(松江市)

勝部晃生



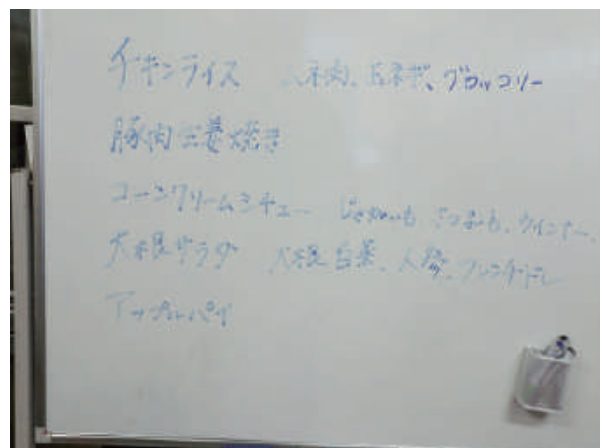


乃木こども食堂（松江市乃木公民館）

冬の寒さを全身で感じるようになった頃、私は乃木公民館を訪れました。乃木公民館では、毎月第3土曜日に乃木こども食堂が開かれています。地元のボランティアの方が中心となつて活動されており、こどもと大人合わせて40〜50人が参加されています。参加者の中には市役所の職員さんもいらっしゃいました。市内のこども食堂を回っているそうです。高校生未満のこどもたちは参加費無料、大人は300円です。

食事を作っているのは主に大人で、献立は一ヶ月前に集まつてきめるそう。今回取材させていただいた時の献立は、チキンライス、生姜焼き、サラダ、椎茸のバター焼き、シチュー、アップルパイ、みかんでした。椎茸のバター焼きは、当日、椎茸をもらったため、急遽献立に組み込まれたそう。皆さんの対応力の高さがうかがえます。

食事を作っている方は皆知り合いなのかと聞くと、そうではなく、初対面の方も多いいとのこと。乃木こども食堂の存在を知り、活動に参加したいと、スイスから来られた日本人の方もおられました。皆さん初対面の方もおられる中で、協力し合つて、和気藹々と料理を作られている空間は、言葉にできないほど居心地の



ホワイトボードに書かれた本日のメニュー



良い、あたたかい空間でした。

ある男性が、二つのシチューを両手でかき混ぜておられ、大谷翔平にもひげをとらない素晴らしい二刀流でした。周りの皆さんも見とれておられました。

今回アップルパイを作っていた方は、お菓子作りが得意だということで、クリスマス会などではクリスマスのホームケーキを作られたらしいです。自分の得意分野を、人を喜ばせることに活かせることに、やりがいを感じておられるようでした。



⇒星形のアップルパイ



私たちが急にお邪魔したのにもかかわらず、あたたかく迎え入れてくださり、ご飯まで一緒に食べさせていただきました。広間は参加者全員が入れる大きさで、トレーを持った子どもたちが、列になって並び、大人たちに盛り付けをしてもらっていました。みんなで座っておしゃべりを楽しみながら、食事ができる空間は小学校の頃の自治体の集まりを彷彿とさせました。あたたかい空間が全身を包み込んでくれる感覚がとても懐かしかった時に、とてもよい思い出になると思います。

デザートのアップルパイは子どもたちに大人気で、おかわりを何回もしている子どもがたくさんいました。おいしそうに食べる子どもたちの笑顔に、大人たちの疲れも吹き飛んだことでしょう。特に、生姜焼きは絶品で、同行した藤浪君と、こんなにうまい生姜焼きははじめて食べたと言っていたほどでした。余った食品たちは、バックに詰められ、参加者の方々が持ち帰っておられました。私たちもしっかりいただいて帰りました。家で食べても変わらずおいしかったです。



運営する安達和弘さん

本職の薬剤師の傍ら、こども食堂を運営しておられる安達和弘さん。こども食堂を開くきっかけになったのは、認知症のカフェを開いたことでした。薬剤師として、認知症の患者さんと接する中で、患者さんと地域の中でゆつくりお話ができる場所をつくるとうと、認知症カフェを始められました。そんなふうに地域の中で活動をしているうちに、地域には高齢の方だけでなく、こどももたくさんいる

ことに気づき、こどもと大人が一緒になつてできることはないかと思われたそう。そこで目をつけられたのがこども食堂でした。もともと島根にこども食堂が少なかったこともあり、乃木の地域でこども食堂を開くことで、地域のため、また、こどもたちの食育のためと考えておられました。こども食堂で作ってもらつて、食べて終わりではなく、次は自分がつくるぞという気持ちになつていってほしいとのこと。そのために、次回1月のこども食堂では、県立大学の大学生とこどもたちが協力し、地域の方にいつも作ってくれてありがとうの気持ちを込めて、食事を作ります。



満足そうな
藤浪君

こどもたちの笑顔や親御さんのほつとしたような感じを、同じ空間で共有できることがやりがいに繋がっているとのことでした。

こども食堂と聞くと、やはり貧しい人が行くイメージがついているかもしれません。過去には貧困の家庭向けにこども食堂を開かれていたところがあったらしいのですが、そこに行くことは貧しいんじゃないかといった噂が立つようになり、行く人が減つて、こども食堂自体が潰れてしまったこともあるそうです。そんな中で、安達さんは、生活に困っている人だけじゃなく誰でも来ていい、第3の居場所になるようなこども食堂を、という気持ちで作られたそうです。たかさんのボランティアの方や、地域の学生、こどもたち、みんなの思いをひっくるめて、ごちゃ混ぜに、柔軟に活動していきたいとおっしゃっていました。

一足踏み入れるだけで、ほつとする場所、いろんな人とおしゃべりをしながら食事をする場所、そんな居心地のよい乃木こども食堂は、みんなの居場所になっているのです。

(かつべ こうせい)



猫と過ごす憩いの場
癒やしを探して

(津和野町)

小谷真生



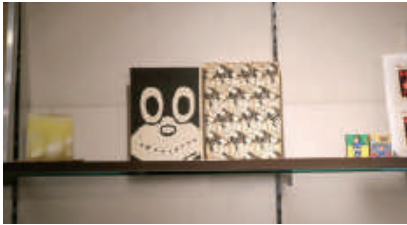
いざ！津和野へ

11月10日悪天候の中、喫茶ダンボールの猫たちに癒やしを求めて、津和野へ向かいました。『ひだまりのおと』史上、津和野は初めての場所、ちよつとした旅行の気分でした。途中、浜田で腹ごしらえをして津和野へ。しばらくするとお目当ての喫茶ダンボールが見えてきました。窓際には猫が座っており、まるでお客さんを迎えているようです。

お店の中は、猫と触れあうスペースだけでなく、衣類や雑貨、本なども置いてあり、音楽とともにゆったりとした時間が流れていました。



福羽さん私物の本の数々



猫たちとリラックスタイム

まずは飲み物を頼んだ後、待ち時間に猫と触れあいました。触れあいスペースにはキャットタワーやベッドなどがあり、猫たちは各々ゆったりしています。外は冷たい雨が降っていて、気温も低かったためか、ベッドでは猫たちが身を寄せあつており、いわゆる猫鍋を見ることもできました。また、座つたとたん寄ってくる猫も多く、山根先生の膝の上でリラックスする子もいて、人慣れしていることがうかがえました。山根先生も猫に癒やされているようでした。しばらく触れあっていると、注文した飲み物ができあがり、猫スペースをいったん離れて、



身を寄せあつて暖をとる猫たち

注文したココアをいただきました。ココアの甘さと温かさが体に沁みわたりあつたという間にコップの中が空になってしまいました。その後、取材の待ち時間にふたたび猫と触れ合いながら時間を過ごします。閉店時間となり、お店を営んでいる福羽和明さんにお話をお聞きしました。



山根先生の膝のうえの猫



膝の上でリラックスしている猫と癒やされている山根先生



椅子に座ると膝に乗ってくる猫たち

猫カフェ誕生のきっかけ

福羽さんは津和野出身であり、東京で音楽活動をしていたそうです。その後40代でUターンし、六日市町の温泉施設に通いながら仕事をしていたといいます。猫カフェを始めたきっかけは、オーナーの横山元志さんにやってみないかと声をかけられたことでした。横山さんは元々譲渡してもらった保護猫を飼っており、その猫たちの子供も増えているので、猫カフェをやりたいという気持ちがありました。喫茶ダンボールの建物は元お土産物屋さんでしたが、バブル崩壊後観光客が減り廃屋のようになっていたのを引き取ったものだそうです。室内の陳列棚なども元お土産物屋さんのものをそのまま使っているようです。



お店を営んでいる福羽和明さん

カフェの猫たち

猫カフェを初めて経営することで、福羽さんは手探りで猫たちはこういう生き物なのだと知ることを知っていきまし。現在、一緒に仕事をしている猫たちは、横山さんのお宅にいた大家族の猫や、新たに入ってきた保護猫です。一匹ずつ個性があり、人慣れしている子、警戒心の強い子などさまざまです。中には子猫の時から育てている子もいるそうで最初はねずみくらの大きさしかなかったそうです。筆者は10匹以上いる中でも特に白猫のゆきちゃんが気になりました。その名前にふさわしい真っ白い体に青い目をしており、とても美人な猫でした。また、大家族の茶トラ猫はみんな顔がそっくりで覚えるのに時間がかかりそうです。



白猫のゆきちゃん

猫たちの視線の先にはおやつが...



猫を育てる大変さ

喫茶ダンボールはペットと一緒に訪れることもでき、猫たちは基本驚くことはないようですが、お客さんのペットの子が来ると戦闘モードに入るようです。また、訪れるお客さんもさまざまで津和野観光を兼ねて来られる山陽からのお客さんや、猫好きの地元の方などが来られます。年齢や目的もさまざまで6〜7割は

は感染などのリスクが高く、とても大変なことだからだそうです。オーナーの横山さんの家に現在いる猫の中にも、一緒に暮らせない猫がいるようで、同じスペースに入れるといじめられる子や、元野良でエサを取りにお客さんの手を引っ掻いてしまう子もいます。しかし、横山さんは猫が好きで離したくないという気持ちがあり、今まで猫を譲ったことはありません。実際に横山さんが猫たちの近くに行くと猫たちも横山さんに近づい

猫目的で来られるお客さんだそうですが、お茶を飲みに来たりミーティングで利用したりするお客さんもいるようです。お客さんの中には猫を譲ってほしい、受け取ってほしいといった声もあるのですが、喫茶ダンボールでは、お店の猫を増やしたり譲ったりしてはいません。ただ、タイミンが合えば、福羽さんがお客さん同士を結び付けたこともあり、やりとりが成立したこともありました。猫の引き取りを断っているのは、新しい子を迎え入れるというの

っており、横山さんに対する猫たちの信頼感が感じられました。



オーナーの横山元志さん

喫茶ダンボールならではの空間

喫茶ダンボールは通常の猫カフェと違い、猫たちと触れあう時間に制限がないことが特徴的です。通常の猫カフェといえば、血統書付きの猫がいたり猫との触れあいに時間制限があったりするとところが多く見られます。しかし、喫茶ダンボールは猫たちとの触れあいに時間制限がないことからゆつたりと過ごすことが

でき、お客さんの中にも一日過ごすという方もおられるそうです。元々カフェのための空間ではなかったことから、福羽さん自身も良い雰囲気や心地よい空間にするために植物を置いたり、音楽が好きであるところから音楽をかけたりと、いろいろ考えてカフェをつくっているそうです。また、喫茶ダンボールという名前は、横山さんが最初にもらってきた保護猫がダンボールに入っていたところから付けられたそうです。



おしゃれな薪ストーブと雑誌



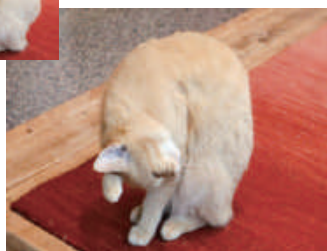
店名である名前が刻まれた可愛い木製パネル



店内の様子

時間が過ぎるのはあっという間で、松江からはすぐに行けたり、通ったりできるわけではないため、名残惜しさは尽きません。福羽さんによると、休日はお客さんも多いので手伝ってくれる人がいてくれるといいとのことでした。近くに住んでいたら、真っ先にアルバイトに入りたい思いでした。筆者自身、猫カフェを訪れるのは初めてで、たくさんの猫や落ち着いた空間に終始癒やされていました。絶対にまた来よう、そう心に決めて喫茶ダンボールをあとにしました。

(ごたに まお)



島根の良さを「さがす」

(出雲市・雲南市)

藤浪楓太

島根の良さとは何だろう。今回は、島根の良さを「さがす」というテーマでインタビューをしました。島根県に住み慣れた自分にとって、島根の良さを再確認するためにはどうすればよいか迷ったあげく、インターン者の方にお話を聞いてみるのはいかがでしょうかと考え、お二人に連絡を取りました。

魅力ある高校へ

出雲市



10月30日、大学の正面玄関で待っていると。懐かしい姿を発見しました。インタビューしたのは長門愛香さん。島根県の県立高校で「高大連携推進員」として活躍されている方です。私が高校時代にお世話になった方で、高大連携推進員の仕事で島根県立大学に来られた際に、インタビューをさせていただけることに

なりました。

高大連携推進員とは、高校と大学の連携を強化する人材です。島根県は高校魅力化事業が盛んにおこなわれており、その一環として地域課題解決型学習が行なわれるようになりました。新しい取り組み対して、高校と大学をつなぐという視点から、高校魅力化に取り組んでおられます。夫の仕事の都合で島根県に来たという長門さん、島根に来たタイミングで高大連携推進員という職業を紹介され、着任されたそうです。



【地域】

仕事柄、地域の人や大学の先生など、人と関わる機会が多いのだそうです。インタビューでよく語っておられたのは、「出会う人みんなすごく優しく、あったかい」という人の優しさでした。また、「一緒に何かやってみようっていう気持ちを持ってくれる人が多い」と語られ、出会う人の優しさやあたたかさにつれながら、仕事や活動をしておられると感じました。

長門さんは、高校と大学をつなぐ仕事をしてられますが、高校の生徒は大学生の話聞きながらそうです。高校生にとって目指す姿であり、興味がわくのだと予想しておられました。大学の授業を受けたリアルな感想を聞くことで、大学がどのようなものか生徒にイメージを持たせることができます。私が高校生の頃は、大学とは未知のものでした。大学進学を目指す者にとって、前もって大学を知れることはとても良いことでしょう。

【魅力】

島根県は大学進学に際して多くの若者が県外に流出している現状がありますが、島根県では長門さんをはじめとした多くの人が地域や学校を良くしようとしています。都会に比べれば遊ぶ場所や若者向けのお店などは少ないですが、何かを良くしようと奮闘する大人に高校生の頃から出会えることは素晴らしいことだと感じました。



雲南から全国へ

雲南市



る、スパイスを一から育て、商品に加工して販売していただける会社です。

【好き×好きを仕事に】

東京でのサラリーマン生活に嫌気がさした山田さんは、千葉の小さな畑を借りて農業を始められました。オフィスワークよりも自然に近い生活に憧れがあった山田さん。一から食べ物を育てた経験や成功体験から、「こんな面白い仕事があるんだ」と思われ、これが農業に携わりたいと思っただけだと語っておられました。

また、商品企画など何かを考えて形にすることが好きで、誰かが面白い、美味しいと思ってもらえるような商品を考えて世の中に出すような一連の流れを実践してみたかったとおっしゃいました。

農業に携わりたいという思いと、商品開発を通じた、経営やマーケティングをしてみたいという思いが掛け合わされて今の事業が生まれたと強く感じました。

【和製コロンブス】

山田さんは大学に馴染めず休学して、1年間世界を放浪していたそうです。ある時、インドでチャイを飲んでいた時、高貴な人が住む町とダウンタウンでは、それぞれチャイの味が全く違うことに気

づいたそうです。高貴な人が住む町のチャイはスパイスの量が少なく、わずかに香るだけなのに比べて、ダウンタウンで飲めるチャイはスパイスの味や香りがとても強かったそうです。この違いが気になり、ダウンタウンの住民に尋ねると、「一番良い茶葉はイギリスに、その次に良い茶葉は高貴な人が住む町へ、俺らの町に来る茶葉はもはや枝だ」と言っていたそう、茶葉単体では美味しい茶は飲めないことから、ダウンタウンではスパイスのよく効いたチャイが飲まれる

のだそうです。いいものが巡ってこない茶葉をどうおいしく飲むかという生活の知恵がたまっているというストーリーにふれ、スパイスの面白さに気づいたとのこと。同じ原料を使った料理でも味が全然違ったりするそうで、言い古された言葉ですが、魔法のように調べて、作り手の思いや考えが一皿になって出てくるということに凄く面白さを感じられ、スパイスにのめり込んでいかれたと語っておられました。

山田さんの「インド旅行での人との出



12月15日、目的地まで車で走らせていると、急に視界が開けました。田んぼと民家が並ぶいわゆる田舎の風景が広がります。当日は、天気が良いのも相まって、とても綺麗な風景でした。地図を頼りに進んで行くと、黒い家とその横に白いプレハブが現れました。入口へ歩を進めると作業しておられる人影が。本日お話を伺う、出雲SPICE LABの山田健太郎さんです。

出雲SPICE LABは、お米を原料とした、

麺やケーキの素などの商品開発から始まり、現在では、スパイスカレーやクラフトコーラを作っておられます。原料であ

会いがスパイスにハマった原点かな」という言葉がすごく印象に残っています。

【想い】

山田さんは、同じコミュニティの先輩との縁があり、雲南市に来られました。島根で結婚され、お子さんもいるそうです。山田さんは島根での縁と同時に島根の外にルーツがあり、「半分は必ず島根に返す」という思いで仕事をしていると語られました。違うルーツがあり、新しい縁やつながりもできる中で、自分が島根と違うルーツとの架け橋になればとおっしゃっています。島根の外でつながりのある人の元へ実際に足を運び、楽しい思いやワクワクした思い、感動など、自分の体験を伝えて、それが島根に還元



料理を全くしない僕でも簡単に作ることができました！ 骨付きの鶏肉と一緒に煮込むとよりおいしく食べられます!!



できれば面白いと言っておられました。また、山田さんは、地元の人々が愛し、誇りに思える商品づくりをコンセプトの1つにしておられます。地元須我町の農家さんが作っているものを、山田さんたちが代表して企画にして販売するという意識をもって事業をしておられました。正にチーム須我です。

山田さんから、クラフトコラーとスパイスカレーをいただきました。しっかりとしたコラーの味わいに、スパイスの香りがあり、とても美味しいコラーでした。カレーも、スパイスから作れる本格的なカレーを家で味わうことができます。

雲南の地で作られたスパイスを使った商品を、是非手にとってみてください。

【まとめ】

山田さんは地域を巻き込みながら、スパイスを育て、それを商品にしておられます。一方で、長門さんは、たくさんの人と出会いながら、島根県の高校が魅力あるものになるよう努めておられます。お二人とも全く異なる取り組みをしておられますが、若者の挑戦を応援する町民の存在や、一緒に地域や学校を盛り上げようという人々の存在が共通していました。島根県はなにもないといわれがちですが、だからこそ、何かに挑戦する「人」、良くしようとする「人」、それを応援する「人」が輝く。それこそが島根の良さではないでしょうか。

(ふじなみ ふうた)



ヨコバマを掘る

(松江市)

小山詩織

みなさんは横浜町を知っていますか？ 横浜はヨコバマと読み松江市にあって、もともと職人の町と呼ばれていました。そんな町で神具を扱っていた神具店の建物をそのまま残して、現在はカフェになっている「ヨコバマ coffee」さんを取材させていただきました。店内には、現在でも神具店だったことを想起させるものがたくさんあります。また、カフェだけでなく、地域の方の作品を展示するギャラリーもありました。

「みんなでまちのごはん」

まずは、11月3日に天神ロータリーでおこなわれた、秋のまちのごはん祭りに参加しました。

この「みんなでまちのごはん」は、1人で食事をするのではなく、みんなで一緒に食べる場を提供したいという想いから始まりました。そして、主催者の方からは、みんなでわいわいできる場を提供し一食でもご飯を作らなくてもよく、ご飯を作る人が楽になればと思ったのだと教えていただきました。「始めるにあたって、大変なことは何もなかった」と主催



「みんなでまちのごはん」で提供されたカレー

者さんはおっしゃいます。また、今回の催しは、自治会ではなく個人のつながりで発案され、自分たちでやろうという想いがつなげて、地域の食堂が開かれしました。当日は、子どもや高齢者の方に向けた食堂で、笑顔の輪が広がっていました。

ココバマ coffee

さて、ココバマ coffeeさんでは、カフェと寺子屋をされています。

こだわりのある店内では、御神木で作られた木の机がカウンターの前に置かれていたり、鉦を全国から集めておられたりします。そして、店内に入って左側にはよこばまギャラリーがあります。こちらには、町内の方が作成した作品がずらり。寺子屋で子どもたちが作った折り紙や絵画、一枚板から作成した魚の彫刻などが飾られており、地域の集いの場となっています。寺子屋では、勉強は半分で、折り紙と一緒に作られているそうです。勉強面では、子どもたちに問いかけて考えさせる方法で教えているとのこと。よこばまギャラリーに折り紙を展示することによって、子どもたちの披露する場となっているそうです。「町内のみなさんのお手伝いが必要ならばこのスベ

スはできなかった」と店主の川村浩一さんは語ってくださいました。地域の方みんなに手伝ってもらって店の掃除から始めたそうです。掃除をする目的があるから楽しかったと、笑顔で話しておられました。そもそも、店の前を歩いていた人から声を掛けてもらえる嬉しさから、町内の方が喜んでもらえる場を作りたいと、ココバマ coffee は始まったのです。

「おしゃべりカフェ yokobama」

11月25日にココバマ coffeeさんで女

性限定のおしゃべり会がありました。横浜町の町内の20代から80代まで幅広い年齢層の方が参加され、お茶をしながら楽しめました。女子会を始めたきっかけについて川村さんは「女性が気軽に話せる機会がないから」と話していました。今回の女子会について、世代を超えた町民の交流とまちづくりに繋がってほしいと川村さん。町内の方に横浜町の魅力や良さについて聞いてみると、「仲が良い。そしてあったかい。芋ほりや玉ねぎの苗植えなどイベントが多くあって、年齢の異なる方が集まって顔見知りとなって。



店内の様子



それがいいなと思います。「子どもの手が離れてこれからどうやって生きていこうかと思つているときに、この場で友達ができる。そして、町内の方から知り合ってもないのに知つた風に声をかけてもらうのが魅力だと思つています。」と話していただきました。また、自宅に知り合いを呼ぶよりもハードルが低く、気楽に集まれてよいとのこと。町の魅力については、前からの知り合い？ つつくり話しかけられ、誰だか分からないけど多分町内の人と名前も知らないけど会話があ

交流の場〈蓼行列〉

そして、松江の伝統行事、蓼行列が重

る町なのだそうです。川村さんによると、「元々職人の町で弟子が有名な職人のところに訪ねてくるため、それを職人が受け入れる。そういったよそから来た人とのこと。現代でも昔の風土を感じるこ



女子会の様子

要な交流の場となっていたことがわかりました。

鑿行列では「よこばまさんの太鼓の音 すごくいい響き」と言ってもらえることが嬉しいと、町内の方は話されます。話す機会がない人とも、鑿行列によって交流が生まれ、女性同士も仲が良くなる一 番いい環境だと教えていただきました。鑿行列の練習のために、盆明けの土曜日の夜から週1日の練習が始まります。10月に入ると毎日練習が行われているようです。このように、集まる機会と場所がある良さ、そこから生まれる地域のつながりを感じることができました。



どう 鑿行列の羽織

横浜町

横浜町には「横浜亭」と呼ばれる、月に2回土曜日の18時から20時まで好きに集まって好きな時に帰る町内交流会があります。この場では男性がメインとなってお酒を飲むため、女性だけが集まれるといいなという意見が地域の方の中でありました。そこで、町内会長の景山弘一さんから川村さんに、女性が集まれる場所をやってみて！と9月に言われたそうです。それが前述した、今回初めて開催された「おしゃべりカフェ yokobama」です。また、これもさきほどあったとおり、横浜町では、芋や玉ねぎを作ってみんなで収穫もしています。さらに、65歳以上の男女の交流の場である「なごやか会」も開かれているそうです。地域の方が集まる機会がたくさんある横浜町だと感じることができました。

初めての「おしゃべりカフェ yokobama」、帰り際になると「じゃ、また。「また。」と至るところから声が響き渡る素敵な時間でした。

(こやま しおり)

Yokobamacoffee



2019年12月にできたヨコバマ coffee のロゴ
川村さんの娘さんがデザインされました



寺子屋に通う子どもたちが作成した学び舎
まはらばーまのロゴ



よこばまギャラリー
町内の方の作品が展示されています

芸能の守り人を「さがす」

（番内ばんないを知ろうの巻）（出雲市）

尾崎 花梨

皆さんは「番内ばんないさん」をご存じでしょうか？ 私の生まれた地域では、幼いころから「番内」が街を練り歩いていました。だから「番内」はみんなが知っているものと信じていました。ところが、実際に友人に話してみると、「番内」を知らないという人ばかり…。

今回は、「番内」について深掘りし、実際に番内をしている人を探してきました。



韓竈神社（出雲市平田町）大祭
で獅子舞を先導する「番内」



番内披露の準備が始まる11月の某日、番内についての情報を得るべく、出雲観光協会の稲根克也さんにお話をうかがいました。

「番内」って一体何者？

1月3日、出雲大社の「吉兆さん」(のぼりを担いで本殿に向かって神通歌(めでたい歌)を歌いながら練り歩き要所でのぼりを建てる祭り)の先導役(道案内)として、先払いをする存在が番内です。番内は絢爛豪華な衣装を身に纏い、白や赤の大きな鬼の面を被り、大きな青竹を持って町を練り歩きます。そして、家々を訪問し、振る舞い酒を一杯ずつ飲みます。どうして番内が怖い容姿なのか、私には疑問でした。稲根さんに伺うと、「自



稲根 克也さん

分の厄や人の厄を払うためではないでしょうか」とのこと。諸説あるようですが、私はとても納得しました。

ちなみに厄年である42歳の男性が番内役をするのが昔の風習だったと話しておられました。以前の風習では番内は誰でもできるものではなかったことに驚きながらも、稲根さんに番内役をしたことがあるか伺うと、大社の人ではないのでしたことがないとのことでした。

出雲観光協会と

「番内」との関わり

番内といえば大社というイメージがあるように、大社を紹介するイベントでは出雲観光協会が番内の衣装を貸し出すところがあるそうです。また、出雲市内の幼稚園や保育園にも貸し出しを行っているそうです。

最後に出雲観光協会で保管している番内のお面を見せていただきました。

稲根さんに番内について詳しい人や実際に番内をしている人を探していることを話すと、大社のコミュニティセンターの方を紹介してください、取材することに。稲根さんありがとうございました。



実際に見せていただいた番内のお面



あいにくの大雨の中、私たちは趣のある大社コミュニティセンターを訪れました。

コミュニティセンター長の成相有一さん、長年番内役をしておられる原田優さんにお話をうかがうとともに、番内の衣装を見せていただきました。





成相 有一さん

原田 優さん

原田さんと「番内」

33歳のときに、自らの衣装を作り、ほぼ毎年番内役をしておられる原田さん。厄年の42歳になる前から続けておられるとのこと。近年は大社が観光地となったため、観光客向けに番内となり、大社の神門通りやメインストリートを歩いているそうです。

「番内」とは一体何者？

以下、出雲観光協会の稲根さんのお話と重複する点もあります。

番内は、「吉兆さん」の先導役として

400年ほど前から存在していました。以前は、42歳の男性が「番内役」でしたが、今では厄年関係なしに番内役をやりたいという男性がやるそうです。原田さんのように毎年やっている方も多いとのこと。「正直、衣装を持っていて男性であればできると思うよ」と原田さんは言っておられました。

番内は厄払いとして歩くため、観光客に「頭を撫でてほしい」「写真を撮ってほしい」と言われることも。青竹を持って歩いているため、ガラガラと大きな音を立てて歩いている番内。その音を聞いて子供が面白がるらしく、成相さんが子供の頃、大社小学校では冬休みの決まりに「番内をかまわない(筆者注…ちよっかいを出さないの意)」と書かれていたことがあったそうです。

「番内」への疑問

私が知っている番内についての疑問を原田さんと成相さんに伺ってみました。・どうして多くの家を訪問し、都度お酒を飲んでいるのか

番内は、街を練り歩きながら、家々を訪問し、コップ一杯のお酒を飲みます。これは、その家の厄を番内が訪問して払うことへのご祝儀としてだそうです。

・どうして「番内」は青竹を持って子供

を追いかけけるのか

私の地域の番内は、大声を出し青竹を持って子供を追いかけける、そんな印象でした。実際に聞いてみると、大社の番内はあまり子供を追いかけたりしないからわからないとのこと。もしかしたら番内をからかう子供を追いかけているのでは？ という回答でした。

絢爛豪華な衣装

今では、番内役のほとんどが自分の衣装を持っているそうです。すごく綺麗な衣装を持っておられたので、実際どれくらいで制作されたのかうかがってみました。

原田さんの場合は、衣装やお面を合わせてなんと21万円で作られたそうです。

昔は、番内の衣装を貸し出す貸衣装屋がたくさんあったらしく、汚れても大丈夫だったため雨でも雪でも番内になっていきましたが、今では持ち衣装のため汚したくないという思いから雪が降ったらその時はやめることが多いとのこと。ちなみに現在衣装を作るには、40〜50万円はかかるそうなので私には作れそうにないです。



実際に「番内」になってみよう

今回、原田さんのご厚意で実際に番内の衣装を着させていただきました。普段女性がなることができない番内になれるということでもドキドキわくわくです。男性用だったので衣装は大きく、私も立派な番内になることができるのか不安でした。いざお面をつけてみると、立派な番内へ変身。手足は短いですが、かつこい番内になることができました。実際着てみると衣装は重たく、これで町を練り歩いていられることに驚きました。また、お面の視野も狭いため、番内になるにも一苦労だなと実感しました。



最後に、原田さんにいくつか質問をしました。内容をまとめてみます。

「原田さんは『番内』を続けていきたいですか」：

番内が大好きだから、歩けなくなるまでしていただきたいのこと。自分が続けることができなくなっても息子に継いでもらいたいと語ってくださいました。吉兆行事やシャギリといった大社の伝統的な芸能を長く続けることが目標です。自分も楽しくやって次世代につなげたいと、いろんなことに挑戦しているそうです。

「若者に『番内』という芸能を伝えるためにどういったことをしておられますか」：

原田さんは中学生に太鼓や笛などを教えたり、保育園にも太鼓を教えに行ったりしているとのこと。将来、教えた子どもが地元に戻ってきたときに覚えていてくれるように教えているそうです。小さい子にも番内行事に触れる機会をたくさん作っているようです。

取材を終えて

番内についてあまり知識がない状態からスタートした取材でしたが、今回3名の方にお話を聴き、番内とは何かということ、大社だけでなく出雲でも大切にされている芸能ということ、小さい子から大人まで多くの人が携わっていることを知りました。また、番内役をしている人を探しているうちに、出雲観光協会や大社のコミュニティセンターなどの芸能を大切にされている方々とお話しができて、さらに衣装を着るといった人生に一回しかできないような経験までさせていただきました。番内は厄を払うだけでなく、人と人を繋ぐ架け橋となっていることを、今回の取材から実感しました。番内に会ってみたい、厄を払ってもらいたいと思った方は、毎年1月3日に行われる「吉兆さん」や前日2日、イベントごとに現れるとのことなので、探しに行ってみてください。また、我こそは番内になりたいという方は是非大社で番内になってみてはいかがでしょうか。

(おさき かりん)

大根島で過去を探す

(松江市)

窪津晴斗

洞窟に行ったことはありますか？

近くだと秋芳洞が有名ですが、島根にも数多くの洞窟があるのです。

今回はその中でも世界的にも有数の溶岩洞である竜溪洞へ取材に行きました。

竜溪洞を目指して

10月29日、松江市駅から松江市八束町にある「竜溪洞」を目指して取材班は自転車走らせました。

約13キロメートルの距離、山道を走っていると、道中は坂道できついところもありました。

しかし、中海を見ながら下るのは爽快感もあり最高の道中になりました。

そうやって自転車をこいでたどり着いた目的地「竜溪洞」。そこには、出雲国ジオガイドの会の木幡さんがおられました。



出雲国ジオガイドの会所属
木幡さん

出雲国ジオガイドの会とは

出雲国ジオガイドの会とは、有志が集まって主に四十二浦巡りについての調査・研究を行っている団体です。なぜ竜溪洞のガイドをされているのか、それは前任のガイド門脇さんが亡くなられる前に、出雲国ジオガイドの会にガイドの引き継ぎを頼まれたためです。

そんな門脇さんの思いや島根の自然について多くの人が知ってほしいという思いからガイドをされています。



竜溪洞と幽鬼洞について解説していただいています。

洞窟へ入ると

洞窟に入るとひんやりしているかと思いきや、外と大きくは変わらない温度の空気でした。竜溪洞のなかは約15度であり、これは年間を通して同じで、このちょうどいい温度が洞窟の中の独自の生態系を守っています。



少しかがまないと頭をぶつけてしまいそうです

洞窟の中には、水たまりが多く存在するのですが、それを踏んではいけません。なぜならそこには洞窟独自の生態系を持った生物がいるからです。今回は、幸運なことに体が真っ白に退化したヨコエビの仲間を発見することが出来ました。この種は何万年か前に洞窟に入ったムカデが暗闇と洞窟に適応したものであり、洞窟の中には獲物がいないためか取材の最中動くことはなく、洞窟生物の独自の生態系を感じられました。今回は発見できませんでした。他にもゴミムシや目の退化した魚などの希少な生物がいるため、研究者には垂涎の洞窟です。



真ん中の白いものはヨコエビの仲間です



洞窟は、天井などはぼこぼこしており、同じ中国地方の洞窟、秋芳洞とはまったく違った印象を受けます。特に異質だったのは、壁面です。天井と違いぼこぼこしているのではなく、ところどころがきれいに整えられたようにみえるのです。下の写真の場所は、まさに20万年前に溶岩が噴出した地点です。ここから100メートルにわたって地面を削り穴を作った自然の力強さに思いをはせることができます。20万年前の噴火であるにもかかわらず、現在でもなお存在感を放っているこの地点は、竜溪洞の中でも随一の注目ポイントの一つです。



20万年前に溶岩が噴出した地点



この穴の先にもさらに洞窟が広がっています

木幡さんに尋ねると、これは自然によつてつくられたものであり、ひとの手が加えられたものではないそうです。しかしながら人工物には見えないそれは、自然のすごさを再確認させられるものでした。また、壁面には至るところに穴があり、覗き込むとその先にも穴が続いており、木幡さんによると洞窟が続いているそうで、神秘的な気持ちになると同時に、恐怖すら感じました。

この竜溪洞は実は、第二洞窟であり第一として幽鬼洞というものも存在しています。広さは幽鬼洞の方が広いのですが、過去に落盤や事故などがあったため、今は入り口を見ることしかできないそうです。木幡さんもいつか開放されることを望んでおられ、その際にはぜひ見学に行きたいと思います。



今回の調査について記事にするために許可をいただいた際には、ほかに多くの洞窟についてのお話をさせていただけました。島根には、猪目洞窟をはじめとして入ることのできない洞窟が多く存在しています。それは危険だからなのはもちろんですが、考古学的な価値が非常に高いことも理由にあります。神話の地である島根で20万年前から残っている洞窟を調査することは、今はもう見ることでしかない島根の過去について知ることのできる貴重な機会であり、そこは、まだまだこれから調査すべき場だからです。

そんな一般人では入ることのできない洞窟についてのお話は過去の島根の真実について思いをはせる浪漫のある時間でした。



島根県にはこのような、古代の浪漫がある洞窟が存在しています。今はあまり多くの洞窟を見ることはできませんが、竜溪洞だけでも全国から見学に来られる方もいるので、一般開放されていない洞窟もいくつかドローンなどで撮影した動画をプロジェクトンマッピングなどで一般の人が見学できるようにすれば、とても良い観光資源になるなと感じました。



(くま) はるま

川跡コミュニティセンター探訪（出雲市）

三成美緒

コミュニティセンターは、地域の人や地元の小学生が集まって交流することが出来る場所です。身近にある施設ですが、案外ご存じないことも多いのでは。そこで、私の地元にあるコミュニティセンターで行われている年間イベントと、そこで働いている人を紹介したいと思います。

イベント紹介

まずは、私の地元の川跡コミュニティセンターを紹介します。地元の人たちからは、親しみを込めて「コミセン」と呼ばれています。川跡コミセンでは、ほかの地域に比べて高齢者の数よりも子どもの数が増えていることから、活動が盛んになっています。

5月前半

かわとチャレンジ広場

川跡コミセンにおいて1年間で行われる大きなイベントを紹介します。5月前



かわとチャレンジ広場 ちまきづくり

半には、小学生を対象とした「かわとチャレンジ広場」、通称「かわチャレ」が始まります。かわチャレでは、ちまき作りやクリスマス会、恵方巻づくりといった季節の行事や遠足や野菜作り茶道もします。登録者数は285名おり、昨年度のかわチャレのイベントの参加者はのべ3536人と年々増えている傾向にあるそうです。

5月後半

かわとマルシェ

5月後半に「かわとマルシェ」が開かれます。かわとマルシェは、コミュニティセンターではなく、近くにある「斐伊川河川敷公園」をもっと知ってほしいという考えから、そこで開催されます。広い公園で子どもから大人までの交流をしてみらうべく、お菓子やヘアアクセサリーを売っているお店や、子ども向けコーナーもたくさんあります。



かわとマルシェ

子ども向けコーナーの一番のおすすめは「かわと逃走中」です。かわと逃走中は、地域に住む大人や大学生がハンターとなつて子どもたちが逃げて交流を図るイベントです。ハンターとなる大学生や大人たちの、実際にあるバラエティ番組の再現度が高く、ハンターが登場するシーンはトラックの中から登場するなど工夫が凝らされ、子どもたちも楽しむことができます。今年のマルシェには、873人が参加しました



かわと逃走中

10月

秋の川跡ふるさと祭り

10月に「秋の川跡ふるさと祭り」と「総合文化祭」が行なわれます。「川跡ふるさと祭り」は例年8月に行なわれ、多くの屋台が出て芸人さんを呼ぶなど盛り上がるのですが、近年は新型コロナウイルスの影響もあり、総合文化祭と連日で行なっています。ふるさと祭りでは、子ども縁日を開き秋のかわと探検隊としてハロウィンウォークラリーを行ない、チェックポイントでお菓子をもらいます。仮装をすることでポイントを多くもらうことができるため、多くの子どもたちが仮装をして参加していました。



ハロウィンウォークラリー

総合文化祭

「総合文化祭」では、川跡女性会の方や川跡長生会の方たちが作る手編みのたわしやEMだんごといった環境に配慮したものや、商工振興協会の方たちが作る焼きそばや綿菓子、青空市場の新鮮野菜や植物が売られています。ステージでは、中学校の吹奏楽や小学校の合唱、川跡の同好会の合唱やかわとチャレンジくらぶの銭太鼓や和太鼓、チアダンスが披露されます。秋の川跡ふるさと祭りの参加者は998人、総合文化祭の参加者は2日間で2867人でした。



総合文化祭



川跡コミュニティセンター

川跡コミセンで働く人

「まちづくりは人づくり」



コミセンで働く坂本さん

次に、実際に川跡コミセンで働く人を紹介したいと思います。今回紹介するのは、坂本君代さんです。坂本さんは、私が小学生のころから勤めておられ、子どもたちからの人気もあり、「さかもつちゃん」の愛称で呼ばれていました。私が小学生のころと現在とを比較した質問をし、坂本さんに答えていただきました。

インタビュー

Q. 勤続何年目になりますか？

A. もう勤めて23年目になります。

Q. 最近と約10年前でコミセンやコミセンの周りで変化はありましたか？

A. 変化ですか、しいていえば少子高齢化のわりに子どもの数は年々川跡地区では増えてきている傾向にありますね。



スサノオマジックで踊るチアダンス

坂本さんによると、川跡地区の子どもは年々増えてきているそうです。たとえば、出雲第三中学校区にある高浜・四絡・北陽の3つの小学校の小学生が集まってチアダンスくらぶのメンバーになっています。10年前は1〜6年生全員の数を数えても約80人程度だったのですが、近年1〜6年生全員で200人を超えてしまったので川跡のチアダンスは北陽小学校の小学生だけで成り立っているようです。今では、文化祭や川跡地区のお祭りでチアを披露するだけではなく、プロバスケットチームのスサノオマジックの試合前に披露することもあり、活動の幅を広げているようです。

Q. イベントについて何か変化はありましたか？

A. 子どもが地区で増えつつあるということから、高齢者向けのイベントよりも川跡地区を盛り上げていくためにも子ども向けのイベントを増やしています。

川跡コミセンには、川跡未来部という企画を専門に考える部署があり企画の計画を専門としているようです。他の地区よりも計画を立ててくれる人たちのやる気もあることから、いっばい企画ができてイベントが増えることはあってもなくなることはないそうです。

Q. 子ども向けのイベントは増えても高齢の方向けのイベント増えないのですか？

A. 高齢の方向けの企画は、コミセンの方が計画を立てなくても、川跡長生会や更生保護女性会といった会があるので、会の中で企画をしているので大丈夫なんです。まだまだ皆さん元気で、いろんな企画をしてコミセンで活動してもらえますね。

Q. 最後に坂本さんがコミセンで働こうと考えていることはありますか？

A. 私は「まちづくりは人づくり」だと思っています。コミセンは人と人をつなぐ場所だと思っています。

あまり地区の行事に参加していなかった高齢の方が、子どもたちとかかわるイベントに参加した後、参加する前よりも性格が明るくなっているなど感じたことがきっかけだそうです。また、職員の高齢化を問題視しており、若い人中心のまちづくりを意識してもらえ、年代ごとに川跡地区内の代表が集まって川跡地区を盛り上げる会議などもしているそうです。



更生保護女性会が作ったEM団子

取材を終えて

今回、坂本さんにお話を聞いたり、イベントを調べてみたりして、私がかわチャレに行っていたころよりも子どもがコミセンに集まるようになっていと感じました。また、一つひとつのイベントも楽しそうで、年中川跡地区を盛り上げることができると感じました。ぜひ、皆さんも地元活動に参加してみてください。

なお、行事の写真は川跡コミュニティセンターにご提供いただきました。ありがとうございました。

(みなり みお)



マスコットキャラクター かわとひめ



私の里親里子探訪記（松江市）野津歌純

社会的養護とは、親と離れて暮らす子どもたちを公的な責任のもとで社会的に養育することを言います。

社会的養護の子どもたちは現在の日本に約 42,000 人（平成 19 年の調査時点）。

そのうち 8 割以上が、乳児院や児童養護施設で集団生活をしています。2 割は「里親」という人たちのもとで育てられます。

私たちが暮らす松江にも「里親」といわれる人々がいます。社会的養護を手助けする里親さん取材しました。

探訪のはじめに

○里親とは

そもそも里親とは、様々な事情により自分の家庭で生活できない子どもたちを、実親に代わって育てる人たちのことです。この制度を里親制度といいます。

○里親の種類

里親は大きく 4 つに分けることができます。

養育里親

事情があり家族と暮らせない子どもを一定期間自分の家庭で養育する里親です。養育期間は数週間から数年、十数年と、子どもの状況に応じて異なります。

専門里親

特に支援が必要な子どもを、専門的な知識を持って養育する里親です。養育里親と

はまた違う要件や研修があります。

養子縁組里親

養子縁組により養育を希望する里親です。

親族里親

両親に代わって祖父母、年の離れたきょうだいなど、子どもの親族が養育する里親です。

この 4 つ以外にも、ファミリーホーム（養育里親家庭を大きくしたバージョン）や自治体の取り組みもあります。

○里親になるには

里親になるには、基礎研修・登録前研修の受講が必要です。市役所や各地域の児童相談所で登録することができます。



○里親になってからの流れ

子どもの紹介から委託までの流れをご紹介します。ただし、子どもの委託方法は家庭によって様々です。これはあくまで一例にすぎません。

①マッチング

児童相談所が里親家庭の状況などを検討し、子どもにとって最適な里親との組み合わせを選定します。

②委託の打診

児童相談所が里親に子どもの状況などについて説明し、委託が打診されます。

③面会

紹介を受けた里親は、一時保護所や施設に行つて、職員の立会いのもとで子どもと初めて面会をします。

④交流の開始

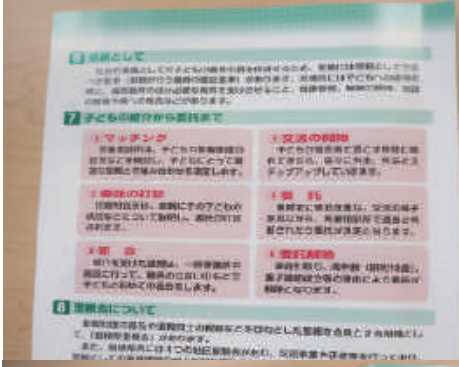
子どもが面会で過ごす時間に慣れてきたら、徐々に外出、外泊とステップアップします。

⑤委託

児童相談所が適当と判断すると委託が決定となります。

⑥委託解除

家庭引き取り、満年齢（原則18歳）、養子縁組成立等の理由により委託が解除となります。



▲里親のパンフレット

11月18日(土) ミニおはなし会

松江で初雪が観測された日の午後、里親さんのお話を伺いにミニおはなし会を訪ねました。会長の宇都宮鏡子さんとはとても朗らかな方でした。

ミニおはなし会は、里親について知りたい方ならどなたでも参加できる会です。今回は会長の宇都宮さん以外にも、児童相談所の方、ショートステイを实践なさっている方、養子縁組を希望されている方など様々な里親さんが参加されていました。

ミニおはなし会に限らず、里親会は活発に活動されているようです。里親と里子の活動では、そば打ち体験やカレー作り、パーベキュー大会など。里親さんと児童相談所の飲み会もあるそうです。

さて、里親のみなさんは周囲に里子のことをどのように説明されたのでしょうか。養子縁組を希望されている里親さんは、身内の方や関係性の深いご友人には伝えようと思われれました。養子縁



▲ミニおはなし会の風景

組をすることで、一区切りでき、伝えられるのではないかと考えているそうです。

宇都宮さんの場合は、里子を連れて町内を挨拶回りされました。学校にも挨拶に行かれたそうです。周囲の人に知ってもらうことで、お互いに受け入れやすくなるのかもしれない。

告知についても伺いました。告知とは、里子に対し、実親がいると説明することです。児童相談所の方は、発達段階に応じて少しずつ里子であることを知らせるのがベストといわれます。しかし、聞いてみると、里子は何らかの理由で事前を知っていることが多いようでした。私たちが思う以上に子どもは周りの人や物を、注意深く見ているのかもしれない。



11月21日（火）

中央児童相談所訪問

●児童相談所の役割

児童相談所には里親担当という専門の職員がいます。里親担当の藤井早希子さんは、里親の研修や、里親と里子を繋げる役割を担われています。

●どんな相談があるのか

相談は里親だけではありません。学校の先生や近所の方、里親里子に興味のある方など、里親関係のことでもたくさんの方から相談があるそうです。里親からの相談は主に、育児不安や非行相談など、子どもに関する相談のようです。

●里親と実親の交流はあるのか

里親と実親の交流があることは少ないそうです。里帰りのときはなるべく里親と実親が会わないように心がける必要があります。里子里親の個人情報を守るためです。



●里親制度の現状

里親の登録者数は増えていますが、実際に委託がある件数は少ないようです。実親の方にも理解がなければ里子に出すことはできません。里親・実親共に理解を深めることが求められています。そのためには、里親について知ってもらえる活動や、抵抗がなくなる活動をしていきたいと藤井さんはおっしゃいました。



▲藤井さん（左）と筆者

●私にできること

海外では里子の存在は当たり前のように認識されています。一方、日本には「血のつながり」を重視する考えが文化に強く根を張っています。受け入れること、現状を伝えることが今の私たちにできることなのだと思います。



探訪のおわりに

ミニお話会と児童相談所の藤井さんを取材させていただき「里子を育てる」とは「多くの人と繋がる」ことなのだと思います。それは例えば、里親会の方々や児童相談所の里親担当の方、そして学校の先生や地域の人たちなど。一緒に悩み、考え、今と向きあう方法を探すことが「社会的養護」と言えるのではないのでしょうか。

私の「里親・里子探訪」はまだまだ続きます。

(のつ かずみ)



KANBAN

(松江市)

看板だけでは何屋かわからないお店、探さないと見つけれられないような小さい看板のお店、そもそも看板のないお店。今回はお店を探すときに目印となる「看板」にフォーカスを当て、看板を製作している会社と3つのお店に取材をさせていただきました。そこから見えてきたのは「枠にとらわれない」という想いでした。

青戸梨紗 吉田瑛美子



01

GLOBARC

Address : 島根県松江市上乃木 8 丁目 1-7 茶山ビル 203 号

Tel : 0852-33-7637

■ globarc



02

PEP

Address : 島根県松江市寺町 211-3 1F 東側 H 店舗

Tel : 0852-69-1583

■ pep.11072022



03

BHAVAN

Address : 島根県松江市伊勢宮町 503-1

Tel : 0852-67-1022

■ bhavan.vintage



04

HOME SWEET HOME

Address : 島根県松江市北堀町 157-4

Tel : 0852-22-0690

■ homesweethome.matsue

そもそも看板はどのように作られているか、その疑問に答えてもらうべく、看板屋さんにも取材へ行くことに。PEPの看板を担当されたグローバークの西森靖さんにお話を伺いました。

01 GLOBARC



きつかけ

親父が看板屋だったんです。私は長男で、出雲で父が看板屋を構えていて、お前が跡継ぎだと言われ、物心付いたときから手伝っていました。当時はデザインを白黒の画面でやっていて、全部文字を打って操作する時代。看板がペンキから機械になった転換期に実家も機械を導入しました。カラーが使えるようになって、すごいな、と。パソコンはすごく得意で、パソコン少年と新聞に載るくらい。機械がすごく好きで、それが物作りにすごく活かされているなと思いますよ。跡継いで、その後は弟に任せて、独立しました。出雲市の研修制度を使って、東京のケーキ屋で一年間ケーキを売っていたのでケーキには詳しいですよ。研修期間の後も寮に住んでいたら、新しい人が入ってこられて、慌てて荷物をまとめて東京を転々としていましたが、帰るバス代しなくなると、観念して帰ってきました。この会社が始まったのがちょうど10年。創業が2012年7月なので、11年前です。創業は自宅で、個人事業主として自分の寝床で、ちゃぶ台1個で。一年半経って松江に出てきて、個人事業から会社化して、2014年、9年前の4月にここに設立したんです。実家が看板屋でしたが、美術が好きだったわけでもデザインが好きだったわけでもなかったんです。元々は、

モットー

綺麗で最新鋭。社内も現場も、道具をきちんと手入れしてあるので綺麗ですね。音楽なんてかかかってないですよ、普通（笑）。入り口も指紋認証で開いたりもします。他の看板屋さんには比べると最新鋭ですね。

自分自身では、行動することが大事だと思っていて、まずは失敗を恐れず行動することにしてるので、失敗はします。冒険好きです。チャレンジもすごく好きですね。好きな言葉で、知行合一というのがあって、知ると行うことは同じという意味で、ポリシーみたいな感じ。知っているだけでやらなきゃ意味がないと思っています。色んな人が、あれを知っている、これを知っていると、言っても、結局行動していないこともあるので。失敗は経験。まず行動して、どんどん経験を積んだ方がいいと僕は思います。僕は失敗して、凹んで成長したんです。思い切っちゃって失敗するのは、やらずにじっとしているより全然良い。大事にしているし、実際しています。だから迷ったときには行きますね。



■ 会社のマークとロゴ

「あしたの為のデザイン」という、この会社の上にあるデザイン会社の社長さんにお近づきの印にと作って貰ったんですよ。このマークは人の集まりを表しています。経営理念に従業員の物心両面の幸福を追求するというのを掲げていて、人を大切にするといいことです。マークを反対にするとびっくりマークになっていて、ひらめきやアイデアを表しています。会社名のロゴは、西森の西に見えるようになってるんです。元々は西森看板という名前だったので、その影響もずっと受けているし、自分の名字でもあるから。

■ 会社名について

グローバルというの、グローバルとアークを組み合わせた造語。アークとは円弧、架け橋という意味で、世界やお店を看板で繋ぎ、海外と繋がる仕事したいなあ。看板をつけることでいろんな人がそれを見つけて、探して繋がっていく。繋がりが増えて、世界中に広がっていくのはよいですね。

■ 会社について

デザインや、その前の企画段階からやっています。大きさや素材、かたちも考えて、お客様に提案します。お客様からロゴデザインや図面を渡していただ

て、その通り作る場合もあります。しかし、図面さえあればどの看板屋さんもほぼ同じものが作れてしまうので、それだと価格競争にもなってしまう。だからこそ、製造は協力会社や提携先をお願いして、企画デザインに力を入れていきます。毎回無茶ぶりではありませんよ、この日までに欲しいという場合や、予算を抑えた場合もあります。

社員はお客様担当、デザイン担当、事務担当がいます。作業台の机はカッティングボードになっていて、作業をしたり、食事をしたり。社員さんの誕生日パーティーもしているんです。仕事形態としては、コロナ前からずっとテレワークが多いです。もともと一人で始めた会社なので、どこでも仕事ができるような環境を整え、自宅や出張先から仕事できるようにしています。出張の多くは情報収集のため。最近では経済特区で発展している中国の深圳で仕入れることが多いですね。また、韓国の展示会にも行きます。韓国の看板は日本より進んでいて、日本では見たことのないような文字が光る高価なものが多いです。値段は韓国の方が安く、普及していました。やはり国産だと高くなるので、中国や韓国の仕入れ先を探すといい目的もあります。

■ 心がけていること

自分が心がけていることは、目的をしっかりと持つことです。こちらの目的は、

そのお店をいろんな人に知ってもらい、繁盛に導くこと。お客様が何をしたいかを聞くようにしていますね。でも半分以上のお客様があまり明確ではないので、アドバイスも行います。看板にも色々な役割があって、集客したい、場所を知らせたいという場合や、ただ表札代わりでいいという場合も。だから、逆に看板以外でウェブの方が良いと思ったら、そっちを勧めます。たとえば話で、ホームセンターでドリルを買う人はドリルが欲しいのではなく、穴を開けたいんですよ。だから、まずドリルを売るのはではなく、穴を開けるという目的に沿った商品を提案しないと違うものを買ってしまう。だから、何のために、何をしたいかという目的を知っていないと提案はできないですね。

■ 施工例

くにびき大橋の上の電光掲示板もやっていて、インターネットで全部差し替えられます。動画も、フォトショップ、イラストレーターの後にはアドビのアフターエフェクツやキャンバで編集しています。翌日から出すことができ、イベント時に一日だけのスポット広告も出せるんです。

県立大学の看板はデザインからやっています。また、島根大学の食堂、バックパネルもほぼ全部作っています。他にも、島根大学医学部の小児科棟で、全体を海のコンプットで壁紙、床、天井を全部変えたんです。それまで真っ白の壁でしたが、親御さんが子供を連れて行く時に少しでも安心できるように、と。学生さんがイラストを描かれて、それを加工、配置するという大きなプロジェクトでしたね。

■ PEPの看板

PEPさんの丸い看板は光りますね。夜にやっているお店は光らないと。人は光るものに吸い寄せられていくので。



PEPと書かれたシンプルな丸い看板がお目見え。からだに優しい食材を使った、贅沢な洋食をランチとディナーで味わえます。ちょうどオープン周年に店主の高橋佳充さんにお話を伺うことができました。

02

PEP



■ 店名の由来

候補はいろいろあったんだけど、3文字にしておく。お店の名前って3文字が覚えやすいらしいんです。そこで、活気、元気、活力という意味の「PEP」に決めました。裏の話をすれば、バルセロナの元サッカー監督の名前でもあるんです。そういう人になりたいという思いもありますね。結構分かってくれる人は分かってくれるんです。

ハンバーグランチ



メニューは自分で考えているけど、一から考えたというより、いろんな人と働いて、いろんなものを吸収して、組み立てているだけだからね。前菜や季節もののメニューは週で変わる。あとはパスタも変わるかな。ランチだったらハンバーグが人気。でも普通のハンバーグなんで、これといって変わったことはしてないけど。夜のパスタはだいたい手打ち。具材も旬のものを取り入れる、みたいに思い立ったらやるっていう感じ。あまりないような組み合わせに見えて、この業界では一般的なんだよね。

■ メニュー

エビとキウイペースト



柿のストラッチャテッラチーズ添え

パンとホタテの
ペーストマスカルポーネ

パスタランチ

実際に煮込んでいる様子を見ながら…

これは香味野菜だね。セロリ、にんじん、タマネギ、鶏ガラ、牛すじが入っている。あとはにんじんのスープ。くたくたになるまで煮込んで、ランチのスープに出している。日替わりのスープだから、白菜だったり、大根、カブ、ゴボウだったり、仕入れ状況で作っている感じ。キッチンを綺麗にしておかないと当時の師匠に怒られちゃうのよ。だから綺麗にしています。



■ ドリンク

熟成タイプのビールかなあ、これは結構珍しいんだけど、賞味期限がなくて熟成してくるからロスがない。あとはベルギーのクラフトビールでフランダースの犬があらわれたデザインのもの。あとはイタリアのペロニーというメジャーなビール。島根のお酒も美味しいね。だけど、他のお店でいっぱい出しているから独自性がなくなるし、被るから、敢えて県産のお酒を使わないようにしています。

ソフトドリンクにも力を入れていて、ストレート果汁で、本当に絞っただけだから体にすごくいい。濃縮還元のものを入れていない自然のもの、砂糖も入っていないものを使用。ワインを作っているところのブドウジュースは高いけど安全なもので、他にも桃ジュース、ブラッドオレンジジュースを取りそろえている。ワインを特に推してはいないかな、出してくれたらラッキーみたいな感じ。女性の方が多いので、ソフトドリンク主体にソフトし始めました。美味しいのは分かっているから、前の会社で使っていたものだったり、自分で買って調べて選んだものだったり。仕入れたら味見して、美味しかったら出す、美味しくなかったら出さ

ない、っていう自分の中の決まりはあります。

■ ここにお店を開いた理由

松江は奥さんの実家もあるし、なにより住みやすいね。ここはもともと空いていて、紹介してもらいました。出身は岡山県で、高校卒業後、料理業界へ進んだ。東京に25年くらいいたのかな、ずっと修行。会社は転々としているからね、どこで働いたって言われたら何社あるか分からないくらい。それで、1年前に独立して今に至る。最終的に自分で店をやりたいんだっていう目標を持ってきたから、それがやっとかたちになったっていうぐらいのことで、別なたいしたことじゃないよ。ランチはひとり、夜はアルバイトの子に手伝ってもらって営業をしている。

■ 看板のデザイン

小学校の同級生に建築士がいて、デザインを頼んだ感じかな。字体とか店舗のイメージも全部同級生にやってもらった。看板はシンブルに、店内は木の感じで、と言ったら、こういうのが良いんじゃない？って。家具を選んだのは自分だけど、大体の配置はお任せ。後は大工さんに任せました。店舗には来てないけど、

図面を書いてくれて、画像を送れば、中を見なくても分かるみたい。

■ 客層

女性が多くなったねえ、急に。雑誌の取材をうけてから女性が増えた。それまでは男性も来てくれていたんだけどね。子供も来やすいようにアレルギー対応もしています。

■ モットー

モットーなんかはないよ、やるしかない、やるだけだから、モットーはないな。〇〇料理とかっていう枠組みはあんまり好きじゃなくて、イタリア料理だったらイタリアンをやらなきゃいけないっていう風になると面白くないね。あんまり枠にとらわれたくないっていうのが看板にも表れているのかもしれないね。今の時代、余計にそういう感じじゃない？それがモットーなのかもしれないね。

■ 夢

独立することが夢ではなくて、目標の通過点なので、夢かあ、夢を考へなきゃいけないね。今から、何をしたいこうかしら。昔は結構あった

けど、いまのところかたちにもなっていないから、まだそこまで考えてられないのかもしれない。まだまだ毎日が手探りなんですよ。

■ 料理

自分はまだまだだと思っているから、どうにかしておいしく作ろうということしか考えてないです。答えは出ないので、このお仕事って。時代も変わるし、みんなの味覚も変わるし、本人の味覚も変わる。大人になるにつれて食べられるものが増えてくるでしょ、それと同じように、この歳になっても変わっていくのよね。昨日まで美味しいと思って食べていたものが、今日そんなに美味しくないということが結構多くて。体調によっても変わるから、その日の日で味が違うような気がする。ハンバーグも実は当初から何段階も変化してきているから、多分一生同じハンバーグは作れない。常連さんは、またハンバーグ変えたの？と気付くんです。自分の中では進化しているつもりだけどね。肉の配合や分量も変えたり、デミグラスソースの味も変えたりっていう感じかな。こだわっているのはなるべく手作り。安心して食べられるものを作ってるかな。(よしだ えみこ)

ミニサイズのまあるい看板が特徴のこちらのお店は、IMAGINE.COFFEEの隣にある系列店、BHAVAN(ばわん)さんです。古着をメインに販売されており、2021年12月に開店しました。

透明な窓ガラスから見える店内には素敵な洋服に家具、靴が置かれ、お店の奥には中庭もあります。2階にもチェックのシャツなど洋服がぎっしりつまった素敵な空間が広がっていました。

今回はBHAVANの店長、田中さんにお話を伺いました。

■ 面白いもの

僕は、古着って全部が面白いものだと思います。

衣食住の中に「衣」って含まれているので、人間が暮らしていくのに、必要なものだと思うんです。もちろんどうでもいいっていう人もおられるし、全員が共感する考えじゃないですけど、せっかくならしていくのに必要なものなら、楽しんで方がいって思うし、楽しむ方法として、おしゃれなのがいいかなって思うんです。

これは古着好きの考えなんですけど、あんまり人と被りたくないっていうのがあって、それを叶えてくれるのが古着だと思っています。いいなって思うブランドに出会ったとして、それを着ていたらたぶん新品っていっぱい数があるものなので、日本中で全く同じ格好をしている人がいるかもしれないですよ。でもそこに古着を一点取り入れるだけで、たぶんもうその日は自分しかしていないであろうコーディネートができるんです。そういう魅力が古着にあるなと思って、ずっと古着屋さんやってます。

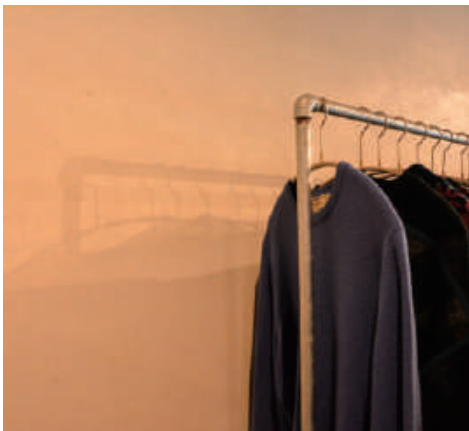
■ BHAVANの店長になるまで

僕はBHAVANが開店する前は、隣でコーヒー淹れていたんですよ。なので5年くらいIMAGINE.COFFEEにいます。

その前は専門学校で一度東京に出て、帰ってきてから自分で洋服屋やっていました。洋服をオンラインショップで買う方も多いと思うんですけど、オンラインショップと実店舗で販売するのって全然違う業種だと思っていて、僕はこの洋服いいよねとか、お話をしながらっていうのがやりたいことなんです。もちろんオンラインショップでここに来られない方も買えるので、それはそれで販売の方法としては素晴らしいと思うんです。でも、お店でオンライン販売の方がメインになってきたときにあんまり面白くないなと思って。で、松江でお店をやっている意味を自分で見つけようと思った時に、お店でコーヒー出したいと思いました。

コーヒーってこの場所に来ないと飲めないものだから、コーヒー飲みながら洋服の話をして、いいのがあったら買ってもらえたらいいかなと思って、コーヒーの勉強をしに自分の店は休憩しました。もともとIMAGINE.COFFEEのオーナーと知り合いだったので、スタッフ募集のタイミングで声かけてもらいました。

今は夫婦で洋服のお直しの自営業もやっていて、BHAVANのパンツの裾上げとかがあると外注として僕たちが直したりしますね。



■ 繋がり

隣の IMAGINE.COFFEE って結構、高校生くらいからおじいちゃんおばあちゃんまで飲みに来られるんですけど、その幅広い年代の方々には何か面白いものを見つけてもらえるお店っていうのが、BHAVAN の裏コンセプトです。

だから、古着以外の商品を置くこともあって、お酒とかはオーナーも僕もスタッフも好きなので、みんなを選んでやっています。あとは繋がりですね。縁があつて出会ったところの商品だけ扱っていますし、イベントでも有名なあの人を呼びたいみたいな感じではなくて、自分たちが出店したときにそこで出会った人たちを呼ぶとか、繋がった人を呼んで紹介するみたいなポップアップをすることが多いですね。

今あるビールは出雲市のクラフトビールなんですけど、繋がりだけではなく、ほんとにおいしいんです。パッケージもかわいいし。そういう繋がりと確かなモノづくりで選んでいます。ワインの方はナチュラルワインっていうカテゴリーで、なるべく添加物を使わずに作るワインを取り扱っていますし、インポーターのワインもやっています。他には出雲市の酒蔵の日本酒も扱っています。すべて安いお酒ではないので、ちょっと特別な時に飲むお酒っていうのをメインで取り扱っていますね。

■ 伊勢宮を盛り上げるためにも

ここを IMAGINE.COFFEE の隣にあるお店として、いい店にしたいと思っていますので、自分がお店の顔になるんではなくて、お店の顔になるようなスタッフを育てていきたいです。自分はこの店をプロデュースしている感覚なので、若い子が経験を積んでいって、また新しいスタッフが入ってきてっていう風にお店の顔になるような子が世代交代していったらいいなと思っています。

BHAVAN はまだできて2年ほどなので5年、10年と長く続く店にしたいです。伊勢宮のこのエリアには、昼間開いているカルチャータクのおしゃれとかを発信するお店が少ないんです。ここは外の人が来やすいエリアだと思うので、地元の人も車を置いて、歩いて楽しめるエリアになると、見た目も都会的になると思うんです。住んでいたら何もなくなってしまうかもしれないけど、海も山も近いし、実はお店も結構増えてきていて、文化的にレベルも高くなってきています。この BHAVAN を出すことでこの辺でもいろいろできることをみんなにわかしてもらえたらいいなと思います。他のにお店が増えると思うので、そういう存在になれるといいなと思っています。そうなるためにもいいお店として長く続けられたらと思います。

■ BHAVAN に ついて

これはね、ヒンディー語です。インドの言葉。ちょっと大きめの建物みたいな意味がある言葉みたいです。この店名は IMAGINE.COFFEE のオーナーが付けたんですけど、もともとインド好きだったのが、コーヒー豆の仕入れで南インドに行ったときにさらに好きになったみたいです。そのおかげでヒンディー語を使った店名になりましたね。

それと彼は店名の響きを大事にしている、「ばわん」っていう響きがいいのと、さらにこのお店がいわゆる古着屋さんっていうよりは、イベントしたりとか、この空間を使って色々発信したいなっていうのがあって、ちょっと大きめの建物っていう意味に繋がっています。

看板は IMAGINE.COFFEE のデザイナーさんにだいたい考えてもらったんですけど、インドの言葉なんです、大きいとインドの飲食店みたいな感じになりそう、でも使いたかったので小さめのサイズ感にしました。

それと、家具のポップアップとかもするんで、月に何度か古着がなくなるときがあるんです。メインが古着っていうだけなので、〇〇屋さんって書くとか〇〇屋さんになっちゃって、まあそうならいように、〇〇屋っていうのは付けていません。

今後も裏のコンセプトは変わらないので、ないとは思いますが古着を買う人が来なくなったら古着はやめてもいいかなくらいの自由な感じですよ。古着にかたくなにこだわってはいないですね。

看板がない、まるで一軒家のようなこちらのお店は、HOME SWEET HOMEさんです。

ストロブの上で温まっている黒いやかん、看板猫のひぐちゃん、こだわりの詰まった洋服たち、木のぬくもりを感じる店内はどこか違う世界に来たようなあたたかさを感じました。

ご夫婦で経営されているこちらのお店。今回は店主の高橋良さんにお話を伺いました。

■ 今あるもので

アパレルってばかばかしいことして、ものすごくたくさん量を作って、流りも作って、半分売ればほとんどだみたいな計算だから、今問題になっている売れ残ったものを燃やしたり捨てたりをやっている業界だったんですよ。売るために流行を作って、旬なものはこれですよと売るのが業界全体がやっていた、僕はそれが許せなくてね。去年のもので、もいものは定価で売ればいいって思うけど、去年のものは売れるわけないだろうみたいな、なんかそういうのが当たり前になってしまっていて、それにすごく反発がありました。だからそういうのも踏まえて自分のペースで商売をするために、今ある材料で自分の作りたいもので長く着られるものを適量作るっていうのをやっていきたいと思っています。

たとえば、今在庫はないとしても、生地が違ってよければ作れるわけですから、2〜3週間待ってもらったら作りましますよっていうと無駄がないじゃないですか。それでも欲しいって言ってくださるお客さんを相手に商売をできれば、それでいいんですよ。

▽ 2007年の写真 東本町時代は建物の幅と同じ大きな看板がありました 提供：山根繁樹



■セレクトショップからの変化

最初は東本町でセレクトショップを30年間していました。今のこの店は元々自分たちの住居で、ある程度スペースもあります。そこで、自分でデザインした洋服と、セレクトした雑貨をメインに、スペースを活かして何かやれるかなと、10年前に移りました。

僕が最初に店を始めたのが1983年。そのときは今でこそ有名なポールミスがまだ紹介されたばかりで、いいなと思ったんでやらせてくださいって手を挙げて、扱い始めたんですよ。当時、ポールミスを日本で扱う7軒目の店でした。その後、マーガレットハウエルとか、まだ有名じゃないけどいいと思えるブランドを扱っていました。そうすると、中国地方だったらHOME SWEET HOMEがいいセレクトしているっていうふうにあパレルの業界で言ってもらえるようになったんです。それで、新しいデザイナーが出てきたら、とりあえずうちに持ってくるみたいなの、そういう時代がありました。

そうしているうちに、気がついたらものすごいブランド数になって、僕も若かったからちょっととんがったものとか、自分でも理解できない服を挑戦して

着てみようっていう時期があって、次々仕入れて、お客さんに紹介していろいろ思っていました。だけど、色々着て経験を積んでいくと、着心地とかサイズ感とか、自分の好みみたいなものがどんどんできてしまつて、その感じでバイイングに行くと、もつとこうしたらいいのと思うようにもなりました。

結局仕入れたものでも自分が惚れ込んでいないと、お客さんに勧める時に、全力で推せない。それはお客さんに失礼かもしれないし、自分の中で引っかけがありません。売り上げが上がればいいじゃないかとは思えないんですよ。その頃から自分で作った革製品も販売始め、だんだん自分を表現したいっていう気持ちが強くなりました。30年やってセレクトショップっていうのには満足したんだろうね。それが60歳になる前だったんですよ。

30年間やってきたお店はその間で固定したイメージがついていたんで、それを全部変えるためにこっちに店舗を変えました。扱うブランドは最小限に絞つて、自分が作った革製品を置きたいっていうところから始まつて、やっていく中でギャラリーとか企画展みたいなことをしてみようかとか、雑貨だったら自分たちが使つてよかったものを紹介したいとか、だんだんと今みたいな感じになった

と思います。

あと、裾上げとかしてもらつつもりでお願いした人が、もともと仕立てを上手にできる人だったんですよ。それで、自分の着たいシャツのイメージを伝えたら、思ったものができたんです。それを着て店に立つていたら、それいいですねと言われたりして、じゃあちよつとやつてみようかなと思つて少しずつ並べ始めたらそれが好評で、服を自分で作るようになりまして。

ただ、LOHOっていうブランドのものは今でも仕入れています。東京の小さなブランドなんですけど、独特のデザインで、ハマった人は誰が何と言おうとこれが好き、みたいなね。僕のデザインも影響を受けているでしょうね。

有名なのは僕が扱わなくても他のところが扱ってくれるだろうから、僕の役目はもう終わったと。いいもので名前の知られていないものもつとたくさんあるはずだし、もしそういうものに出会えたらそれを紹介したいっていう気持ちが強くなりました。

北堀町の自宅に移つてきてからは、流行りとか気にしなくなりましたね。親しい人には「高橋教」ってイジられるくらい、イベントの時はうちのオリジナルを着た人がたくさん来てくれます。

■探すこと、真似すること

いきなりすばつと思つたところには行かないんですよ。それに、今決めた道があつても方向転換していくらでもできることだし、してもいい。でも、やっぱり悩むことは大事。めんどくさいな、じゃなくて自分のこだわりっていうか、それを大事にする方がいいかなと思う。僕は、自分の生き方のこだわりを店にぶつけている感じだね。

■ 自分のしたいことで稼ぐ

学生時代にいろんなバイトをして自分のしたいことを見つけようと思っていました。でも、寮も嫌だったから休みの日は海まで行って波乗りをしていて、そこには波乗りのことしか考えてないみたいなのがいっぱいありました。その中には自営業の人たちも多くて、当時の僕みたいな型にはまったピシツとした感じじゃない生活があつて、僕は絶対そっち側がいいと思いました。

転勤で山口に行ったときに、そこにあったアパレルショップに通っていたら、たまたまそのお店が従業員を募集してて、声かけてもらったので、じゃあ僕は松江でお店を出したいから、3年ほど修行させてくださいって言って働かせてもらいました。そのときに保険会社は辞めました。

生活していくためにはもちろん収入も必要だけど、自分のしたくないことをして、稼ぐためだけに仕事をしてっていうのは嫌だなと思って。稼ぐためにも自分のしたいことで能力を惜しまずにやって稼げたら、これだけ幸せなことはないって思ったんですよ。そんなの気にしな

いっていう人もいるだろうし、仕事と好きなことは別だつていうのもあるだろうけど、何を一生過すかつていうのが自分の中では大問題だったんですよ。それぐらい探しました。

■ 世の中の変化

僕らが店を出した時代は、洋服屋でコップや竹かごを売っているようなところはなかったんですよ。餅しか売ってない餅屋とか、八百屋があつたり金物屋があつたりしたんです。それが今では何でもありつていうかどんどんミックスして、商売の形態は変わりました。何屋さんつていうのはなくて、自分たちのしたいことが自由にできるつていうふうになってきましたね。だから、それに対応しないと生きていけないつていうのもあるし、前のお店だったら逆に浮いた感じになっていたかもしれない。商売始めて僕が感じたのは、とにかくずっと同じことはできないなつていうこと。お客さんも世の中も変わるし、いろんなものが変わつていくので、それとどうやって付き合うかみたいなことは考えます。変えながらでも少しずつ時代と共に歩み続けるつていうのは大事だと思えます。だから40年続けられたんですよ。

インスタもほんとはしたくなかつたんだけど、4年くらい前、昔からお世話になつている岩井窯の山本教行さんに、情報発信としてインスタグラムはやらなきゃだめだよつて言われて。始めたら結果的に色々な繋がりができて、言われたとおりやつてよかつたと思つています。ただ、インスタを通して洋服を売ろうとかは思つてなくて。店の雰囲気もそうだけど、インスタを見て実際に来てみたらなんか違つたつて思われるのが嫌なので、できるだけ自然に写真を撮る、載せるためにわざわざじゃなく、つていうのに気を付けてます。(あおとりさ)



編集後記

☆「ひだまりのおと」史上初の取材地、自分も初猫カフェということで素敵な空間や可愛い猫たちに癒されて思い出に残る楽しい取材となりました。猫たちの写真をたくさん撮ったので、行ったことのないみなさんにも癒やしをお届けできていると嬉しいです。(真)

☆この授業は、私が入学前からずっと取りたかった授業だったので初めは何を取材しようかとワクワクした気持ちでいっぱいでした。多くの方の協力を得て、山の魅力や知識を詰め込めた記事になったと感じています。今回取材に応じて下さった方々、先生方本当にありがとうございました。(花)

☆この度は貴重な経験をさせて頂きありがとうございます。今回「さがす」というテーマになり、私たちは看板を選びました。デジタルに慣れ、アプリで検索する今も、最終的に頼れるのはアナログだなど感じます。そんな看板から伝わる人の温かさをこの記事を通して感じ取っていただけたら嬉しいです。(瑛)

☆取材を通して、何もなかったらいいな、松江にも素敵なお店が多くあることに気づけました。お店の方々にたくさんお話を聞かせていただき、素敵な記事にすることができたのでぜひ皆さんに読んでいただきたいです。取材にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。(青)

☆取材をする中で、向き合うということに決して一対一ではなく、周囲の人と相談したり一緒に悩んだりして、考えを進化させることもかもしれないと思いました。最後に里親会の皆さん、児童相談所の藤井さん、取材に協力してくださり本当にありがとうございました。(純)

☆文化情報誌制作を通して、はじめての取材や記事の執筆はたいへん貴重な経験となりました。企画立案から取材の準備、編集作業などすべてが、だれかに届けるための視点と柔軟性を養い、学びと成長につながりました。制作に関わった多くの方々に感謝いたします。(崎)

☆取材から編集まで自分たちで行うことの大変さを学びました。レイアウトで何度も悩みましたが、満足のいくものになりました。川村さんをはじめ、取材をご快諾いただきました横浜町内の皆様、ありがとうございます。横浜町の魅力を

たくさん感じることができました。(詩)

☆インタビュを通じて、2人の方との素敵な縁ができました。このご縁を、そしてこれからの縁を大切にしていきたいと、今回の出会いを通じて思いました。長門さんと山田さんには、お忙しい中インタビューを受けていただきました。ありがとうございます。(楓)

☆今回、地元注目してインタビューを行いました。自分の小さい頃から変わらないもの、時代によって変化したものを知ることができました。インタビューで分かったことを伝えるために、記事にして自分で編集してい

く難しさを学ぶ良い機会になったと思います。(美)

☆こども食堂について取材し、こどもたちの笑顔が溢れた瞬間に心打たれました。食の大切さや地域の結びつきを伝える場には、コミュニティの温かい結束力を感じました。帰り際に私の手とズボンをか

れでもかと舐めてきたちびっ子のこと、を、生涯忘れることはないでしょう。(生)

☆取材を通して、20年住んできた島根にもまだまだ知らない魅力があることに気づきました。編集の際に写真を見返して、丁寧な解説してくださった木幡さんに改めて感謝の気持ちが湧きました。携わってくださった全ての方、ありがとうございました。(晴)

☆第5号が完成しました。有馬毅一郎先生、ありがとうございます。最多の履修生、記事もバラエティに富んでいます。お楽しみいただけると幸いです。(繁)

ひだまりのおと 第5号

2024年3月20日発行

編集 『ひだまりのおと』編集部

責任者 山根繁樹

E-mail: s-yamane@u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部

文化情報学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社

制作指導 小倉佳代子 日高正樹 山根繁樹



津和野町 喫茶ダンボール